

# いすゞ



第 126 号

2025 年 9 月  
日本野鳥の会三重 <http://miebird.org/>



イワツバメは三重県では留鳥として見られます。繁殖生態、まだわかっていない渡り時期のねぐら、越冬期の行動などをご紹介します。

私が一番好きな鳥はイワツバメで、調査研究の対象でもあるのですが、イワツバメについてはさまざまな文献や資料を際限なく収集しています。イワツバメの調査と資料集めは、ライフワークとなっています。イワツバメに初めて出会ったのは1998年の3月。実家（大台町）の近くを飛んでいるのを見つけました。その数日後、そこから5kmほど離れた橋の下にコロニーを発見しました。それからほとんどに接点はなく、再びイワツバメに出会ったのは

2003年の4月です。大学（山梨県）に営巣するイワツバメを調べるようになりました。イワツバメの文献を探すと日本語のものは少なく、調べるうちに徐々に深みにはまっていきました。2006年12月には、実家の近くの2箇所のコロニーで越冬を確認しました。越冬を確認できたことも、イワツバメの観察を続けている理由のひとつです。この場所では、2022年1月もイワツバメは越冬していました。

## 繁殖生態

繁殖生態の調査は、2003年から2007年に山梨県東部でおこないました。調査をしたコロニーでは50巣程でイワツバメが繁殖していました。造巣日数、産卵数、抱卵日数、育雛日数、巣立ち雛数を第1回繁殖と第2回繁殖に分けて記録しました。多くのイワツバメは3月にコロニーに渡来しますが、古巣の補修や造巣は4月に入ってから開始されました。東海地方以南ではイワツバメが越冬していることが少なくありません。これらの地域では、本州中部よりも早い時期から繁殖に入ることが知られています。

## 目次

イワツバメの生活史 —繁殖・渡り・越冬—	2
表紙の言葉	2
宮川河口砂州の渡船による調査報告	4
今シーズンの宮川河口のコクガン	6
ハヤブサの繁殖	7
2025年 大台ヶ原宿泊探鳥会	8
ツバメの子育て応援事業	
JA みえきた四季菜 尾平店へ感謝状	10
推しの一枚 ミソサザイ	11
北勢中央公園の冬鳥の状況	
〜ツグミの数は減少しているのか〜	12
セグロアジサシについて	15
野鳥記録	16
2025年度 日本野鳥の会三重 総会	20
理事会報告	22
探鳥会予告（2025年9月～12月）	23
事務局だより	23
探鳥会報告（2025年4月～2025年7月）	24
編集後記	28

## 表紙の言葉

### シロチドリ

名張市 田中 豊成

伊賀地方に住む者にとっては、シロチドリは身近な鳥ではないです。時折、津市や松阪市でシギやカモメ等の海鳥類を観察する際に見て喜ぶ程度です。最近のシロチドリの繁殖状況は知らないですが、今以上に増えてくれたら嬉しいものです。何しろ県の鳥であるし、会報名にもなっているから、余計に親しみを感じます。私は、主に伊賀地方の山野で野鳥を観察していますが、山林では近年野鳥たちが随分と減ってきたように見受けられます。鳥インフルエンザの影響が大きな要素ではないでしょうか。地球温暖化も、影響しているかもしれません。鳥インフルエンザの解決策は、どうすれば良いのでしょうか。とにかく、再び多くの鳥達が増えてくれる事を望みます。



巣に集まるイワツバメ

造巣日数の平均は  $21.1 \pm 3.8$  日 (±標準偏差,  $n=14$ ) でした。造巣期間中に巣の下で採集した巣材は、エノコログサ、ヤブガラシ、カモジグサ、スズメノカタビラ、スギナ、ヨモギ類、イロハモミジの葉、ケヤキの葉、アカマツの葉、トビ、ヤマドリ、キジバト、アオバト、トラツグミの体羽などでした。草本や木本の葉は地上に落ちていたものを持って来ているようです。ヤマドリやアオバト、トラツグミといった森林性鳥類の体羽が使われていたのには驚きました。これら3種はコロニー周辺で普通に見られる鳥ではありません。アオバトの羽については2019年と2021年も使っていましたので、2000年代の調査をした年に偶然利用したものではないと思います。ハト類の羽は抜けやすいため、おそらく空中を漂っていたものを運んできたのでしょう。

産卵数、抱卵日数、育雛日数、巣立ち雛数を表に示しました。抱雛日数の平均は  $4.7 \pm 0.9$  日 ( $n=12$ ) でした。同じツバメ科のツバメとくらべ、産卵数や巣立ち雛数は少ない傾向にあります。イワツバメの育雛日数は、小鳥類のなかでは長めです。雌雄で雛に食物を運び、ツバメよりも産卵数が少ないにもかかわらず、どうして育雛日数が長いのでしょうか。これはイワツバメの特異な(?)習性と関係しているようです。巣立ち後の雛は、巣にはほぼ戻りません。親鳥は雛が確実に飛べるようになるまで育てて

から、巣立たせていると考えられました。ヒヨドリやホオジロなどは、雛はほとんど飛べない状態でも巣立ちます。巣内に長くいることのほうが捕食される危険が高いためでしょう。イワツバメの巣は目につきやすい場所に作られるものの、地上にいる捕食者は簡単には巣にアプローチできません。また、巣の出入り口が狭いため、開放巣性の鳥類よりも卵や雛が捕食されにくいと思われます。さらにイワツバメは、雛が飛べずに巣立つと助からないような場所に巣を作っていることが少なくないのも一因でしょう。

## 渡りの時期のねぐら

イワツバメは繁殖期も国内の越冬地でも、通常は古巣をねぐらにしています。しかし、渡りの時期のねぐらはまだ見つかっていません。ツバメ、コシアカツバメ、ショウドウツバメは渡りの時期、アシ原や河川敷などをねぐらにしています。なぜ、イワツバメだけねぐらが見つからないのでしょうか。イワツバメの雛は巣立ち後、巣に戻らないことは先ほど書きましたが、それではどこで寝ているのでしょうか。そしてもうひとつ、これは標識調査をしていてわかったのですが、雛の巣立ちが近づくと、親鳥は巢外で夜を過ごすようになります。雛が大きくなると巣内が狭くなるからだと思われます。アマツバメ類のように、イワツバメも飛びながら寝ているとしたら、ぜひ確かめたいところです。もし、巣以外のイワツバメのねぐらを観察されましたら、お知らせいただけますとありがたいです。

## 越冬期の行動

三重県の越冬地で観察をしたイワツバメの行動ですが、コロニー周辺では早朝と夕方以外はほとんど姿が見られません。これは繁殖地での渡来初期の行動と似ています。おそらく、日中は飛翔性昆虫の多い場所に採食に行っているからです。日中は河川の上空や養鶏場の近くを飛んでいることが少なくありません。飛翔性昆虫が多く得られる場所を探して行動しているようです。そのコロニーでの越冬を確認するには、夕方に見に行き、巣で就暁することを観察する必要があります。

三重県ではイワツバメは留鳥です。ということは、換羽の様式や繁殖に影響する越冬期の行動などを調べられるということです。簡単ではないですが。

表 イワツバメの繁殖

	第1回繁殖	第2回繁殖
産卵数	$3.57 \pm 0.57(2-4,54)$	$3.09 \pm 0.78(2-4,35)$
抱卵日数	$15.69 \pm 0.94(14-19,52)$	$15.87 \pm 0.69(15-17,23)$
育雛日数	$26.62 \pm 1.24(24-31,47)$	$27.8 \pm 1.91(25-34,25)$
巣立ち雛数	$2.98 \pm 0.74(1-4,47)$	$1.92 \pm 0.70(1-3,25)$
* 平均値±標準偏差(範囲, サンプル数)。		



## 宮川河口砂州の渡船による調査報告



伊勢市 中西 章

2025 年 1 月より環境省伊勢志摩国立公園管理事務所から伊勢志摩国立公園内の農耕地の野鳥生息調査を当会が受託し、南勢地区のメンバーが中心となって、現在調査継続中です。この業務の一環で 2025 年 3 月 20 日に宮川河口砂州の渡船による調査を行ったので、その様子を紹介したいと思います。

宮川河口砂州は伊勢市大湊から豊浜にかけて、宮川河口先端付近の砂州で、先端は大きく 2 か所の大洲に分かれており、大洲の内海側は主に芦原ですが、中心部の陸地はチガヤやセイタカアワダチソウなどの草原となり、灌木が 10 数本あるのみです。

そして外海の海岸線は約 2 キロにわたって砂浜が続いており、遠浅なので干潮時には干潟が出現し、二つの大洲は陸地としてつながります。

冬季の鳥相としては、やはり河口部にガンカモが集まり、大湊側には近年コクガンが越冬します。今シーズンも最大 16 羽のコクガンが越冬しました。3 年前にはナベヅル 48 羽がねぐら場所として越冬したこともあります。

砂州には渡船するしか上陸する方法がないことから、通常は陸地の大湊側もしくは豊浜側から観察するしかなく、外海側は見ることはできません。そこで 3 月 20 日午前 8 時に大湊側から渡船して、砂州に上陸し、野鳥の生息状況を調査しました。

まず大湊側からの河口付近ではコクガン 11 羽をはじめとしてカモ類がほとんどで、数の多いスズガモ (200)、ヒドリガモ (120)、マガモ (120)、カルガモ (80) に交じり、ヨシガモ (20)、オカヨシガモ (4)、オナガガモ (20)、ウミアイサ (20) がいました。コクガンやヒドリガモは砂州の先端付近に漂着するアオサやアマモなどの海藻を食するために飛来してきます。そして砂州に上陸して毛繕いや休憩したりしています。スズガモなどの潜水ガモは一番数が多いのですが、ほとんど海上で休憩しています。スズガモは 3 月頃になると、多い時は 2000 羽ほど豊浜側河口に集結することがあります。またこの日はツクシガモ 6 羽が観察されました。今シーズンは五主海岸近辺で 30 羽ほど越冬して



調査風景



大湊側砂州先端部



コクガン 11 羽



いた群れの一部かもしれません。

カモ類以外の水鳥のセグロカモメ (20)、ユリカモメ (2)、カンムリカイツブリ、カワウ、ヒメウなどは海上で魚を捕食したりしていました。調査日では確認できなかったのですが、近年ズグロカモメの越冬が観察されるようになりました。また遠くの海上のポール上にはミサゴ (3) が止まっており、スズキやボラなど魚の捕食の機会を待っています。砂州の沿岸部にはアオサギ、ハシボソガラス (20)、カワウ (20)、トビ (3) などが観察できました。



タヒバリ

上陸してから、外海の海岸線沿いから内陸の草原部を観察しました。その中で確認できた野鳥として、カワラヒワ 50 羽の群れや、タヒバリ (5)、ホオジロ (2)、ヒバリ (20)、スズメ (2)、ヒヨドリ (2)、ツグミ (5)、モズが観察できました。特に草原部に入るとヒバリが飛び出し、そのまま上空で囀る姿を何度も観察しました。またシギ・チドリ類ではダイゼン (50)、ハマシギ (50)、キョウジョシギ (20)、シロチドリ (20) が観察できました。シロチドリ以外は越冬しているシギ・チドリ類です。調査は満潮時であったため、ハマシギやシロチドリの群れが外海の砂浜と草原の間で休んでいました。これらの姿は



シロチドリ



ツクシガモ



ハマシギ

大湊側の陸地からは見ることはできません。

このように宮川河口は冬季ではカモ類の餌場および休憩場として、シギ・チドリ類も満潮時は砂浜で休憩場、干潟時には餌場として、他の野鳥は大洲の芦原や草原を餌場やねぐらとして利用しています。猛禽類では、調査時ではトビ、ミサゴしか確認できませんでしたが、チュウヒは比較的よく観察されます。おそらくチュウヒも餌場やねぐらとして利用しているのではないかと思います。過去の記録ではオオタカ、ハイタカ、ハイイロチュウヒ、ハヤブサ、チョウゲンボウ、コチョウゲンボウ、ノスリ、コミミズクなど多種多様な猛禽類が確認されています。宮川河口は、特に冬季に関してはカモ類が多いことや渡船でないと人が入れない大洲の草原に小動物や野鳥などが多く生息していることから、猛禽類の捕食を支えるだけの自然体系が残っていると思われます。

調査員：中西 章、濱口 雅也、西村 泉、井上 梓、  
笹間 俊秋